

ヨハン・ゴットリープ・シュテファニー作『劇場支配人』の台本について —— 当時の上演記録・評判そして改訂版 ——

野口秀夫

1. はじめに

犬輔：『劇場支配人』台本の対訳が終わり、劇中劇・劇中歌の原典調査を済ませたから、やっと作品の狙いが何であったのかを考える準備が整ったね。

鳥代：そう、シュテファニーだけでなく、モーツァルトの狙いも知りたいわ。早速議論を始めましょう。

教授：ちょっと待った！ その前にまだやっておくことがある。当時の俳優・歌手が誰だったのか、当時の評判はどうだったのか、そしてシュテファニーはその評判をどのように捉えたのかなど調べておく必要がある。きっと役に立つ情報が出て来るであろう。

犬輔：分かりました。もう少し準備に時間をかけましょう。

鳥代：またお預けなのですね。仕方ないですけど。

2. 初演及び一般公開の俳優・歌手たち

教授：86.2.7のオランジェリーでの初演時、および86.2.11, 86.2.18, 86.2.25のケルトナートーア劇場での一般公演時^{注1}の俳優や歌手については断片的な記録しか残っていない。それらをつなぎ合わせて何とか全員を割り出す作業が必要になるのだ。

犬輔：ではツィンツェンドルフの当日付の日記^{注2}（フランス語）から見てみましょう。

[...] 私たちは《劇場支配人》のタイトルのドイツ喜劇を聴きに行った。ザッコ夫人とランゲが『ピアンカ・カペッロ』からの作品を、アーダムベルガー夫人とヴァイトマンが『利発な田舎娘』からの作品を演じた。カヴァリエリ嬢とランゲ夫人が歌った。全体的に陳腐 [médiocre] であった。

鳥代：『利発な田舎娘』のレーシェン役をアーダムベルガー夫人が歌ったという根拠はこれが出典だったのですね。

犬輔：86.2.21付け『ヴィーン実報 Wiener Realzeitung』^{注3}にはケルトナートーア劇場での一般公開初日の上演にも、この二人の出演が記録されています。

今月の11日、ケルトナートーアの隣の劇場では国民劇場俳優により、一幕の機会作品《劇場支配人》が（はじめて）上演された。音楽を付けたのは宮廷楽長モーツァルト氏。
機会作品としては—— それに対して作者（シュテファニー弟氏）は彼のために定められた筋と俳優たちの人数・名前の両方を事前に手に入れていた——間違いなく良いものをたくさん含んでいる。ここでは『煽られた夫』からの場面だけが不適切だと思われる：それはかったるかったる。『ピアンカ・カペッロ』からの悲劇的な場面の代りに、より好ましい選択をするのは簡単なことだったろうと思われる；だが作者がもしこの作品にこだわるのであれば、そこでもっと効果を上げるような状況を作り出すことが出来るだろうと思われる。しかし、最も的を射た選択は『利発な田舎娘』からの場面、そこではアーダムベルガー夫人とヴァイトマン氏が全面的な喝采を受けた。モーツァルト氏の音楽もまたいくつかの格別な美しさによって際立っていた。

鳥代：随分詳しく書かれていて参考になるわ。

犬輔：ベルリンで出版された『文学と劇場の天体暦 Ephemeriden der Litteratur und des Theaters』(1786)^{注4}から「様々なニュース」の欄を見てみましょう。

皇帝陛下は今年四旬節には枝の主日まで、国民俳優が1週間に4回ケルトナートーア劇場に出演する許可を今年初めてお出しになった。しかし、このようなことはオーストリアの他の地域あるいはヴィーンにおける他の劇団には許されていない。陛下は昨年と同様^{注5}、2月7日にシェーンブルンで再び祝宴を催し、この機会のために書かれた作品をドイツ劇俳優およびイタリアオペラ歌手に上演させた。ドイツ劇団は：シュテファニー弟氏、シュテファニー夫人、ブロックマン氏、ランゲ夫妻、アーダムベルガー夫妻、ヴァイナン [ヴァイトマン] 氏、カヴァリエリ嬢、そしてザッコ夫人。[イタリア劇団は略] ドイツ作品はシュテファニー弟氏により書かれ、イタリア作品はカステイ氏による。演者たちは各々50グルデン受領した（前年は25グルデンだった）。両作品とも後にヴィーンのケルトナートーア劇場で3回上演され、満員の入りで大成功を収めた。

鳥代：登場人物は男性7人と女性3人ですから、これで全出演者の名前が分かりました。あとは役と照合させればいいのね。

教授：歌手の3人は、ほぼ間違いなく、ヘルツ夫人がコロラトゥーラの扱いかからランゲ夫人（アロイジーア）、ジルバークラング嬢がカヴァリエリ嬢、フォーゲルザングがアーダムベルガーであろう。しかし、俳優の方は照合がむずかしい。

犬輔：簡単ですよ。ツィンツェンドルフによればヘルツがランゲ、クローネ夫人がザッコ夫人、プーフがヴァイトマン、フォーゲルザング夫人がアーダムベルガー夫人ですから、残る女性役はプファイル夫人だけで、それをシュテファニー夫人に当てれば全てです。

鳥代：でも、残る男性の役については、劇場支配人フランクと銀行家アイラーに対し、シュテファニー弟とブロックマンの二人なので、どちらがどちらなのか照合できないわね。教授の仰る通りだわ。

教授：したがって、どちらが適しているかの推定にならざるを得ない。つまり劇場支配人フランク役をシュテファニーがやるのが最もふさわしいと誰もが思うだろうから、多分そうなんだろうと思うしかない。











犬輔：ところで、従来の文献ではこぞってプーフ役をランゲが演じたと書いてあります^{注6}。何故なのでしょう。

教授：それはオットー・ヤーンの『W・A・モーツァルト』が初版^{注7}、再版^{注8}共に次のような配役表を載せていたことに端を発しているのだ（矢印で我々の割り振りに修正しておこう）。

Frank, ein Schauspieldirector	Fr. Stephanie d. j.	
Eiler, ein Banquier	" Brockmann.	
Puf } Schauspieler	" Lange	
Herz } Schauspieler	" Weidmann	↔↔
Mad. Pfeil } Schauspielerinnen	Mad. Sacco	↔↔
Mad. Krone } Schauspielerinnen	" Adamberger	↔↔
Mad. Vogelsang } Schauspielerinnen	" Stephanie	↔↔
Vogelsang, ein Sanger	Fr. Adamberger	
Mad. Herz } Sangerinnen	Mad. Lange	
Mad. Silberklang } Sangerinnen	Mlle. Cavalieri	

鳥代：間違いの原因についてクリストファー・レイバーン^{注9}は「ヤーンの出演者リストで両ケースの名前がどうして逆になっているのかはっきり分からないが、配役が“俳優”や“女優”で括弧付けられているので、出演者の名前がランダムに書かれている可能性もある」と推定しているわ。レイバーンは既出の『文学と劇場の天体暦』を参照していないけれど、ヨーゼフ2世の劇団に所属する俳優の既知のレパートリーを元に私たちと同じ割り振りに帰着しているのね。その点では、私たちの方が資料に基づいた有力な説と言えるわ^{注10}。

犬輔：間違いが起こらないよう配役と出演者を纏めておきましょう。肖像画付きです。

			
Frank	Eiler		Puf
Johann Gottlieb Stephanie d.J.	Johann Franz Hieronymus Brockmann		Joseph Weidmann
			
Herz	Madame Pfeil	Madame Krone	Madame Vogelsang
Joseph Lange	Anna Maria Stephanie	Johanna Sacco	Maria Anna Adamberger
			
Monsieur Vogelsang	Madame Herz	Mademoiselle Silberklang	
Josef Valentin Adamberger	Aloisia Lange	Catarina Cavalieri	

3. 初演及び一般公演の評判

- 犬輔：さっきのツィンツェンドルフの日記で『煽られた夫』が抜けているのは、評価に値しないとの意思表示ですね。
- 鳥代：ヴィーン実報も『煽られた夫』からの場面だけが不適切で、かったるかったると言っていました。
- 教授：時代物の英国喜劇はその積りで観劇しないと、俄かには馴染めなかったのだろう。
- 犬輔：同紙は『ビアンカ・カペッロ』についても、その「悲劇的な場面の代りに、より好ましい選択をするのは簡単なことだろうと思われる」と述べ、「だが作者がもしこの作品にこだわるのであれば、そこでもっと効果を上げるような状況を作り出すことが出来るだろうと思われる」と、悲劇を選択したことへの遺憾と、改訂を加えてでも効果を追求すべきだったと言っているんですね。
- 鳥代：でも、その後で『利発な田舎娘』からの場面を最も射た選択と評価し、「そこではアーダムベルガー夫人とヴァイトマン氏が全面的な喝采を受けた」とポジティブな評価をしているのが印象的です。
- 犬輔：多分『利発な田舎娘』は会話が生き生きと描かれているから、芝居の出来も良かったのでしょう。ところで、それぞれの劇中劇に原典があって、その引用であることには誰も触れていませんね。原典の存在に気付かなかったのでしょうか。
- 教授：何らかの原典があってそこからの引用であることは、“選択”という言葉使いがされていることから分かっていると想像されるが、原典が何年か前にヴィーンで上演され、見聞きしたことがある作品だとしても、どの作品だったのかまでは正確には理解できなかったということだ。一般聴衆に理解を期待するのはなおさら無理であると言わざるを得ない。
- 犬輔：ツィンツェンドルフは「全体的に陳腐だった」と言っていますが、これは台本についてだけでなくモーツァルトの音楽も含んでのことなんですね。彼の個人的評価ですが…。
- 鳥代：一方でポジティブな評価として、ヴィーン実報は「モーツァルト氏の音楽もまたいくつかの格別な美しさによって際立っていた」と言っているし、ベルリーンの出版物も「ケルントナートーア劇場で3回上演され、満員の入りで大成功を収めた」と言うから、公には成功作だったと言われていたと考えていいのでしょうか。

4. シュテファニーの反省

- 教授：シュテファニーは1792に自らのジングシュピール全集を出版した^{註11}。この全集は現在において、少なくとも二つの価値を保っている。一つ目はその序文であり、ジングシュピールに対するシュテファニーの考えが詳細に述べられている。二つ目は『劇場支配人』台本の改訂版が収められていることである。
- 鳥代：えっ、『劇場支配人』の台本に改訂版があるのですか。
- 犬輔：モーツァルトの死後ですから、K.486とは無関係ですよ。後世の受容に関する研究には必要になるかもしれませんが。
- 教授：そうとも言えない。改訂理由が『煽られた夫』と『ビアンカ・カペッロ』を自作のオリジナルの劇中劇に差し替えた点にあると言えば考えが変わるかね。
- 犬輔：おっ、シュテファニーが批評を受け入れて、自ら替えたんですか。それだったら、台本の狙いを考察するときに改訂前後を比較して、それが失敗から挽回への改良なのか、会心から妥協への迎合なのかの吟味をする材料になりえますね。
- 鳥代：随分辛辣な見方をするのね。
- 犬輔：ジングシュピールへのシュテファニーの考えは次回に検討することにして、早速『劇場支配人』の改訂版を訳してみましよう。



4.1 シュテファニーのジングシュピール全集から『劇場支配人』改訂第3場

鳥代：第3場の改訂部分は『煽られた夫』をシュテファニーのオリジナル『新たに見出だした配偶者たち Die wieder gefundenen Eheleuten』に替えたものよ。

犬輔：あらすじを事前にばらすのは止めておきましょう。読んでのお楽しみです。

第3場 承前、プファイル夫人	
<p>MADAME PFEIL Wie, Herr Frank? Sie hören, dass die große Madame Pfeil hier ist und kommen nicht zu mir? Suchen mich nicht auf? EILER Eben war er im Begriff, zu Ihnen zu gehen. PUF Die steckt uns alle in Pantoffel. MADAME PFEIL Nun, haben Sie's ihm schon gesagt? – Sie sind in misslichen Umständen, Herr Frank? Ich will Sie herausreißen, will mich bei Ihnen engagieren. Aber alle Ersten Rollen, von der Soubrette bis zur Königin, muss ich bekommen. Was geben Sie mir Gage? FRANK Madame – – – EILER Zehn Taler die Woche. MADAME PFEIL Was! der großen Pfeil nur zehn Taler! Herr, man sieht's, dass Sie Ihren Vorteil nicht verstehn, darum sind Sie auch zugrunde gegangen. Für meinen Namen allein sollten Sie zehn Taler geben. FRANK Madame! ich habe alle Achtung für Ihre Verdienste, aber meine Umstände erlauben mir überhaupt nicht, Sie – EILER Ich bitt Sie um alles in der Welt, nehmen Sie sie an! PUF Mehr als zwölf Taler kann er Ihnen wahrhaftig nicht geben. FRANK Ich mag sie gar nicht. PUF Sie müssen die Ehre, dass Sie die ganze Gesellschaft in Leben und Tätigkeit erhalten und berühmt machen werden, auch in Anschlag bringen. FRANK Ja, wohl berühmt! MADAME PFEIL Nun gut, aus Barmherzigkeit sollen Sie mich für zwölf Taler haben. Von meinen Talenten werden Sie keinen Beweis fordern, das bin ich überzeugt; aber Sie sollen sehen, wie weit ich's im Unterrichten gebracht habe. Sie werden</p>	<p>プファイル夫人 ご機嫌如何、フランクさん? 偉大なプファイル夫人はここです。来ていただけなかったの? 探さなかったのですね? アイラー (困惑して) まさに彼が貴方に会いに行くところでした。 プーフ (独白) 夫人はもう我々皆を手の内にしている。 プファイル夫人 (アイラーに) 彼には話しましたか? —— (フランクに) 貴方は厄介な状況にありますね、フランクさん? 貴方を苦境から解放したい。そして貴方に私の運命を委ねたい。でも私はスーブレットから女王まですべての主役を果せますのよ。お給料は頂けますよね? フランク マダム… アイラー 週に10ターラーです。 プファイル夫人 何ですって! この偉大なプファイルにたった10ターラーとは! 人の言う通り貴方はご自分の利益をご存じなく、それが駄目なところですよ。10ターラーは私の名前のためだけの支払い分です。 フランク マダム! 貴方の長所はすべて理解しています、しかし今の状況が全く私を許さないのです。貴方は… アイラー (フランクに密かに) 受け入れてください! これだけはお願いします。 プーフ 彼は貴方に12ターラー以上払うことはできません。 フランク (プーフに密かに) 彼女は全く好かん。 プーフ 貴方はまた、活発な活動により劇団全体を維持し、そして有名にするという榮譽を担うことを計算に入れ、考慮しなければなりません。 フランク (独白) そう、大いに有名にだ! プファイル夫人 まあ、貴方は慈悲で12ターラーをくださると仰るのね。貴方は私の才能の証拠を求めないお積りでしょう。私はそう確信します。でも、私がどれだけ教育に注力しているかを貴方は知らなくてはいけません。アイラーさんを俳優にしたのが私だと聞けば驚く</p>

<p>erstaunen, was Herr Eiler unter meinen Händen für ein Akteur geworden. Kommen Sie, wir wollen die Szene aus dem wieder gefundenen Eheleuten spielen.</p> <p>EILER Sehn Sie wohl, da muss ich schon wieder spielen.</p> <p>PUF Ich will soufflieren.</p> <p>EILER O ich hab sie so oft spielen müssen, dass ich keinen Souffleur brauche.</p> <p>MADAME PFEIL Nun, wird's bald?</p> <p>EILER Gleich! gleich! "Welch Glück für mich, Madame, daß ich Sie auf meinem schwermüthigen Spaziergang treffe!"</p> <p>MADAME PFEIL "Sie sind schwermüthig?"</p> <p>EILER "Im höchsten Grade!"</p> <p>MADAME PFEIL "Und glauben also wohl gar ich soll Ihnen die Schwermuth vertreiben?"</p> <p>EILER "O! Wenn Sie es nicht thun, so giebt es nichts in der Natur, was mich davon heilt."</p> <p>MADAME PFEIL "Sehr verbunden! Aber ich muß Ihnen sagen, Sie kommen übel bei mir an, Erstens bin ich selbst schwermüthig und gieng deshalb spazieren, um mich aufzuheitern; und dann war ich in meinem Leben nicht aufgelegt, irgend jemand von der Schwermuth zu befreien. Denn ich finde es das abgeschmackteste Geschäft von der Welt einem andern die Grillen zu zerstreuen, sich auwinseln zu lassen und wohl gar Theil daran zu nehmen."</p> <p>EILER "Und ist doch so ein göttliches Geschäfte!"</p> <p>MADAME PFEIL "Mag sein; aber Ich bin nur eine arme Sterbliche, keine Göttinn."</p> <p>EILER "Und haben so viel Göttliches in Ihrem Blick!"</p> <p>MADAME PFEIL "Tausendmal verbunden! Aber um Vergebung, haben Sie schon einmal etwas Götterähnliches gesehen, daß Sie so gut darüber urtheilen können?"</p> <p>EILER "So wie ich mir eine Gottheit einbilde sind Sie! – unendliche Güte, anbethungswürdige Reize, das höchste Ideal der Schönheit, kurz, ganz Sie! In Ihnen stelle ich mir eine weibliche Gottheit vor."</p> <p>MADAME PFEIL "Zehntausendmal verbunden, daß Sie mein geringes Ich so erheben! Aber wie nun? wenn ich gleich eine der wesentlichsten göttlichen</p>	<p>でしょう。(アイラーに)いらっしやい。『新たに見出した配偶者たち』からのシーンを演じましょう。</p> <p>(少し後ろに下がる)</p> <p>アイラー (フランクに密かに) お分かりでしょう、私は彼女と再び演じたい。</p> <p>プーフ 私はプロンプターをやりましょう。</p> <p>アイラー いや、彼女とは何回も演じさせられたのでプロンプターは必要ありません。</p> <p>プファイル夫人 さあ、すぐに演りましょう。</p> <p>アイラー 了解! 了解! (何かを上下させてキャラクターに入り込む)「奥様、憂鬱な散歩の途中で貴方にお会いできるとは誠に幸運です!」</p> <p>プファイル夫人 「憂鬱でいらっしやるの?」</p> <p>アイラー 「極度に!」</p> <p>プファイル夫人 「それで貴方の憂鬱を私に追い払ってほしいとお思いなのね?」</p> <p>アイラー 「ああ! もしそうでなかったなら、自然の中に私を癒すものは何もありません」</p> <p>プファイル夫人 「私の義務にするのね! でも、貴方に言わなければなりません。貴方は悪い時にいらっしやいました。まず、私は自分自身が憂鬱なので、自分を元気づけるために散歩しています。そして私の人生の中で、どなたかの憂鬱を解放して差し上げたような経験はありません。ですから、気鬱を他に紛らわせ、それに寄り添い、それに没頭することが、おそらく世界で最も上手な方法だと思います」</p> <p>アイラー 「それは、まるで神業ですね!」</p> <p>プファイル夫人 「そうかもしれませんが、私は女神ではなく、生身の哀れな人間です」</p> <p>アイラー 「そして貴方の目には神性がある!」</p> <p>プファイル夫人 「千倍もの義務の押し付けだわ! それはご遠慮いたします。でも、それについて適格に判断できる神業を見たことがあるとでも?」</p> <p>アイラー 「私が神をイメージするのは貴方です! 無限の優良さ、魅力的な容色、美しさの最高の理想、要するに、すべてが貴方に! 貴方の中に私は女性の神をイメージしています」</p> <p>プファイル夫人 「1 万倍もの義務の押し付けで、貴方はそのように取るに足りない私をあげつらうのですね! でも、どうでしょう? もし私が</p>
---	--

<p>Eigenschaften nicht besitze, Sie von Ihrer Schwermuth zu heilen, wie kommen Sie dann mit Ihrem Vergleich zu Stande?"</p> <p>EILER</p> <p>“Daß Sie diese Eigenschaft im vollkommensten Grade besitzen, ohne es eingestehen zu wollen, ist ein Beweiß, daß ich in diesen wenigen Minuten schon einen großen Theil meiner Schwermuth loß bin.”</p> <p>MADAME PFEIL</p> <p>“Ha! ha! ha! Ist wohl nur Einbildung, oder es war mit Ihrer Schwermuth nicht weit her. Indessen, wenn es denn doch wahr wäre, daß ich eine so fürchterliche Widersacherinn der Schwermuth bin, und ohne mein Wissen und Willen sie verscheuchen kann ... Ha! ha ha! man weiß selbst nicht was man alles für Eigenschaften besitzt — — — so habe ich doch auch das Recht, mich nach dem Grund der Krankheit zu erkundigen?”</p> <p>EILER</p> <p>“Allerdings!”</p> <p>MADAME PFEIL</p> <p>“Nun also mein halbgenesener Patient, was verursachte denn Ihre Schwermuth?”</p> <p>EILER</p> <p>“Die Liebe!”</p> <p>MADAME PFEIL</p> <p>“Die Liebe? Grade so geht mir’s auch!”</p> <p>EILER</p> <p>“O spotten Sie nicht ! das wäre kein Götterzug!”</p> <p>MADAME PFEIL</p> <p>“Sehen Sie wohl, daß Sie mit Ihrem Urtheil zu voreilig waren? Aber um Sie nicht zu Lügen stehn zu lassen, und um mir nicht selbst etwas von meinem wahren Werthe zu rauben, den ich finde so etwas erhabnes darinn eine weibliche Gottheit zu scheinen – so muß ich Ihnen sagen, daß ich nicht spotte, daß es leider Ernst ist.</p> <p>EILER</p> <p>“Wir hätten also wirklich einerlei Anliegen? – Wir können uns also desto freier mittheilen und Sie werden meine Qual um so besser beurtheilen können.”</p> <p>MADAME PFEIL</p> <p>“Das weiß ich alles nicht; muß es erst aus Erfahrung erproben. Wenn das indessen etwas zur Lindrung beiträgt, daß man so Kummer gegen Kummer vertauscht, so wollen wir ans Werk gehn. – Sie sind also verliebt? Ich bin es auch. Nun, und woran liegt es denn?”</p> <p>EILER</p> <p>“Ich liebe ohne Hoffnung.”</p> <p>MADAME PFEIL</p> <p>“Grade mein Fall auch. Haben Sie einen Korb bekommen?”</p> <p>EILER</p> <p>“Das kann und werde ich nicht; den ich wage es</p>	<p>貴方の憂鬱を癒すための最も本質的な神の資質の一つを持っていなかったら、どうやって貴方の状態に対応できましょう？」</p> <p>アイラー</p> <p>「貴方が最も完璧な方法でその能力を持っていると認めるであろうとは思っていませんが、この数分間ですでに私の大部分の憂鬱さがなくなっていることだけは確かです」</p> <p>プファイル夫人</p> <p>「ハ！ ハ！ ハ！ 想像力が働いただけでしょう。あるいは貴方の憂鬱はまだそこまで進んではいなかったのかも知れません。一方、もし私が憂鬱のひどい敵対者であるというのだったら、私は知識と意志なしで憂鬱を追い払うことができますね … ハ！ ハ！ ハ！ 人は自分がどのような資質を持っているのかわからないものです。— だから私は病気の原因について尋ねる権利を持っているかも知れないですね？」</p> <p>アイラー</p> <p>「確かに！」</p> <p>プファイル夫人</p> <p>「それでは、半分回復した私の患者さん、貴方の憂鬱の原因は何ですか？」</p> <p>アイラー</p> <p>(溜息をついて)「恋です！」</p> <p>プファイル夫人</p> <p>「恋？ (溜息をついて) それは正直、私の感じていることでもあります！」</p> <p>アイラー</p> <p>「ああ、嘲らないでください！ それでは神業とは言えないでしょう！」</p> <p>プファイル夫人</p> <p>「貴方の判断はあまりにも急ぎすぎたということがお分かりですか？ でも、貴方の仰ることが嘘にならないように、また、私の本当の価値も失わないように、私は女性の神性をとても気高いと思っているので、私は嘲りません。至って深刻です」</p> <p>アイラー</p> <p>「それで、私たちには本当に懸念があるのでしょうか？ —— 私たちはより自由に意思疎通ができ、貴方は私の苦しみをよりよく判断することができるのですよ」</p> <p>プファイル夫人</p> <p>「すべてを知っているわけではありません。経験から学ぶ必要があります。でも、もしこれが悲しみを別の悲しみと交換する悲惨さにしかならないのなら、そのまま続ける方がいいでしょう。—— それで貴方は恋をしているのですね？ 私もです。では、なぜですか？」</p> <p>アイラー</p> <p>「希望を持たずに恋しています」</p> <p>プファイル夫人</p> <p>「正直、私の場合もそうです。貴方は拒絶されたのですか？」</p> <p>アイラー</p> <p>「拒絶されていませんし、されたくもあり</p>
---	---

<p>nicht, mich meinen Gegenstände zu entdecken.”</p> <p>MADAME PFEIL “Wieder mein Fall. Denn der Räuber meiner Ruhe wagte sich nicht mir seine Liebe anzutragen; und ich kann es doch nicht gegen ihn thun!”</p> <p>EILER “Sonderbare Aehnlichkeit!”</p> <p>MADAME PFEIL “Ja wohl sonderbar! Aber bei Ihnen ist der Fall doch anders; denn als Mann haben Sie das Recht sich zu erklären, das kann ich als Weib nicht. Warum schweigen Sie also?”</p> <p>EILER “Unauflöbliche Bande fesseln mich!”</p> <p>MADAME PFEIL “Schweigen Sie still, ich bitte Sie! oder ich glaube, wir sind eine und die nämliche Person, denn ich bin im nämlichen Fall.”</p> <p>EILER “Wäre es möglich? Nun so hören Sie meine ganze traurige Lage.”</p> <p>MADAME PFEIL “Stille! Stille! denn ich mäbte Ihnen ein ähnliches Vertrauen schenken — und ich denke nicht einmal gerne über mein Schicksal, noch weniger mag ich davon reden — Wir wollen lieber von den Gegenständen unsrer itzigen Liebe sprechen. Darf ich mich unterfangen zu fragen wer der Ihrige ist?”</p> <p>EILER “Sie beehren mich durch diese Aufforderung und ich gehorche ohne Scheu — Nur — dürfte ich bitten eines gleichen Vertrauens gewürdigt zu werden?”</p> <p>MADAME PFEIL “Ja, ich will Sie zum Vertrauten meiner Schwachheit machen. Also nur getrost! Wen lieben Sie?”</p> <p>EILER “Sie liebe ich! bete ich an! — Ach! Mitleid mit mir, wenn auch nicht Erhörung!”</p> <p>MADAME PFEIL “Ha! ha ha! ich muß wahrhastig lachen! So was romanhaftes habe ich selbst im Siegwart nicht gefunden.”</p> <p>EILER “Mitleid flehe ich, und Sie spotten!”</p> <p>MADAME PFEIL “Nicht wahr, wieder kein Götterzug? Ja ich bin eine große Sterbliche. Aber nehmen Sie mir deshalb meine Gottheit nicht weg, es ist wieder kein Spott. Ich lache nur über die Gleichheit unsers Schicksals — denn — Vertrauen gegen Vertrauen, wissen Sie, daß ich Ihre Liebe bemerkte — daß ich nach und nach davon hingezogen wurde, und — daß Sie mir nicht gleichgültig sind.”</p>	<p>ません。私には自分の何が問題なのかを見出す勇氣はありません」</p> <p>プファイル夫人 「再び私の場合です。私の心の平安の盗人が、彼の愛を私に提供することを敢えてしなかったからです。そして、私も彼に対してそうすることはできません！」</p> <p>アイラー 「奇妙な類似だ！」</p> <p>プファイル夫人 「そう、変ですね！ でも、貴方の場合は違います：貴方は男性として自分自身を説明する権利があるけれど、私は女性としてそれを行うことはできませんから。それなのに、なぜ貴方は黙ったままなのですか？」</p> <p>アイラー 「避けられぬ絆が私を縛る！」</p> <p>プファイル夫人 「黙っていて。お願い！ 私も同じケースなので、私が思うに、私たちは同じ人物なのですわ」</p> <p>アイラー 「それは可能でしょうか？ さあ、私の悲しい全体状況を聞いてもらいましょう」</p> <p>プファイル夫人 「お静かに！ お静かに！ 私は貴方に同様の確信を持っていただくわ。それに、私は自分の運命について話すことは疎か、考えることさえ好きではありません。私たちはむしろ、私たちの直接の愛の対象について話すべきです。私は貴方の言う人が誰であるか尋ねてもよろしいでしょうか？」</p> <p>アイラー 「貴方はこの要求によって私を尊敬し、私はためらうことなく従うでしょう。さて、私は貴方と同じ確信を持つ榮譽を受けるべきですか？」</p> <p>プファイル夫人 「はい、貴方に私の弱点を知っていただきたいのです。確信をもって！ 誰を愛しているのですか？」</p> <p>アイラー 「彼女を愛しています！ 大好きです！ — ああ！ 惨めなことに、聞き届けられていません！」</p> <p>プファイル夫人 「ハ！ ハ！ ハ！ 私は本当に笑わざるをえません！ そのような小説もどきはジークヴァートに探しても見つけれないわ」</p> <p>アイラー 「私は同情を懇願し、貴方は嘲笑する！」</p> <p>プファイル夫人 「そうではありません、改めて、神業ではない？ はい、私は偉大な生身の人間です。でも、私の神性を私から奪わないでください、それは再び嘲笑の的にはなりません。私たちの運命の平等だけを私は笑います。やはり、確信に対する自信。貴方は分かっているでしょう、私が貴方の愛に気づいたことを、私がそれに徐々に惹かれたことを、貴方が私に無関心ではないことを」</p>
--	---

<p>EILER “Wie! ich dürfte hoffen – – dürfte mir also schmeicheln! – – O! welche schreckliche Lage! – – Der Gegenstand den ich an bete, verachtet mich nicht, und ich darf mein Glück nicht verfolgen! Nun bin ich erst ganz unglücklich!” MADAME PFEIL “Nun, da haben wir's! wäre es nicht besser gewesen, wir hätten geschwiegen? Was nützt es uns nun, daß wir uns erklärt haben? da stehen wir nun einander gegen über, spielen eine rührende Lustspielszene, und vermehren unsern Gram statt ihn zu lindern.” EILER “Sie müssen mein entsetzliches Schicksal wissen, um mich zu rechtfertigen. Ich fodre kein gleiches Vertrauen dafür, denn ohnmöglich kann Ihr Fall auf den meinen passen, und ich stünde zu tief unter Ihnen. Vor drei Jahren reißte ich durch die Niederlande. Eines Abends saß ich in Brüssel auf meinem Zimmer und – – itz denke ich weit eher ans Sterben, als ich damals ans Heirathen dachte. – Ohnverhofft tritt ein Weltgeistlicher ins Zimmer, und macht mir folgenden Vorschlag: Mein Herr! Gegen Ihnen über ist ein Frauenkloster; ein Mädchen von achtzehn Jahren, von gutter Geburt, die morgen wider ihren Willen eingekleidet werden soll, hat Sie gesehen, weiß wer Sie sind, und ist entschlossen, Ihnen ihre Hand zu geben, wenn Sie Herz haben sie anzunehmen. Sie wird auf Betrieb ihrer Mutter zum Klosterleben gezwungen, die dadurch ein ansehnliches Vermögen ihrem Bruder zuzuwenden gedenkt. Schön, reich und jung! Sind Sie entschlossen, so folgen Sie mir und ich werde das übrige besorgen. So ein Antrag verwirrte mich, ich konnte mich nicht sogleich entschließen, und doch wollte ich auch nicht gradezu Nein sagen. Er drang immer mehr in mich, entdeckte mir noch mehr Umstände, daß ich mich endlich bereden ließ ihm zu folgen. Ich sah' sie. Ein Engel von einem Mädchen! ganz Unschuld und Güte! der Gott der Liebe saß auf ihrem Gesichte! und ich konnte keinen Augenblick anstehen, mich ihr ganz hinzugeben. Man traute sie mir an, brachte mich mit ihr in ein ander Logis und ich vollzog die Ehe nach allen Rechten, die mir die priesterliche Einsegnung dazu gab. Man hatte mir gesagt, ich müsse bei Tagesanbruch mit ihr abreisen, um den Verfolgungen ihrer Familie zu entgehen, und hatte Breda bestimmt, um dort die Rechte die ich nun erlangt hatte, behaupten zu können; ich stand also eine Stunde vor Tags auf, ohne eine Minute vor Entzücken geschlafen zu haben, gieng in mein Quartier, und machte Anstalten zur Abreise – – Aber ach! als ich zurück kam, fand ich das Zimmer leer, und erfuhr, daß die so ich zu meiner Frau genommen, so eben mit einem andern abgereißt sei. Ich wurde faft</p>	<p>アイラー 「何と！ そうありたいものです。お世辞が上手ですね！ ああ！ なんとひどい状況でしょう！ 私が崇拝する対象は私を軽蔑しない代わりに私は幸運を追求してはいけないのです！ 今、私はとても不幸です！」 プファイル夫人 「さあ、行きましょう！ 黙っていた方が良かったと思いませんか？ 私たちが自分自身を説明したことはどれほど良いことですか？ ここで私たちはお互いに出会い、感動的な喜劇の一場面を演じ、悲しみを解放させる代わりに悲しみを増します」 アイラー 「貴方は私を正当化するために私の恐ろしい運命を知らなければなりません。貴方のケースは私自身のものと一致していないので、私はそれに対して同じ確信を感じません。3 年前、私はネーデルラントで稼ぎまわっていました。ある晩、私はブリュッセルの私の部屋に座っていました。—— その時、当時、結婚する人よりもはるかに多くの人が死ぬのだということを考えていました。—— 予期せぬことに、世俗の司祭が私の部屋に入り、次のような提案をしました。ご主人！ 貴方に女子修道院のお話です。18 歳の生まれの良い女の子が明日 —— 彼女の意志に反してですが —— 着飾って、貴方を見に来ます。貴方が誰であるかを見て、貴方が彼女を受け入れる心があれば彼女は貴方に手を差し伸べることを決意しています。彼女は母親の意向で修道院生活に入ることを余儀なくされており、それにより彼女の兄弟にかなりの財産を残す積りでした。美しく、賢くて若い！ 貴方が決心するならば、私についてきてください、私は残りの世話をしましょう。そのような申出は私を混乱させ、私はすぐに決定することができませんでしたが、ノーとも言いたくありませんでした。申出はどんどん私を追い立て、さらに多くの状況をもたらし、ついに私は申出に従うよう説得されました。私は彼女を見ました。女の子の天使！ まったくの無邪気さと優しさ！ 愛の神が彼女の顔に宿っていました！ そして私は彼女に完全に降伏せざるを得ませんでした。彼女は私に委ねられ、彼女と一緒に別の場所に連れて行かれ、司祭の奉獻が私に与えたすべての権利によって結婚をしました。私は、彼女の家族の迫害から逃れるために夜明けに彼女と一緒に去るように、そして、私が今得た権利を主張する場所としてブレダに行くように言われました。それで、私はまんじりともせず夜を過ごし、夜明けの 1 時間前に床を出て、近所に行き、出発の準備をしました。—— しかし、ああ！ 私が戻ったとき、部屋は空になっており、それで私はあの人を私の妻にしたのだが、今ちょうど別の事情で中断したようだと考えました。私は半狂乱で、探索を続けることができずして今に至るまで、私</p>	<p>1714 に南ネーデルラントはオーストリア領ネーデルラント地域としてハプスブルク家の統治下になった。1790 にベルギー合衆国となったがその年の終わりで取り戻している。ブリュッセルはその主要都市。</p> <p>ブレダはブリュッセルの北北東約 85 km</p>
--	--	--

<p>rasend, konnte nicht weiter erforschen, und noch bis diese Stunde weiß ich nicht, wo diese Elende hingekommen ist, die mir auf zeitlebens Fesseln angelegt hat, ohne meinen Kerkermeister zu kennen.”</p> <p>MADAME PFEIL “Sie sind der Graf v, Warren?”</p> <p>EILER “Ja!”</p> <p>MADAME PFEIL “Warum erscheinen Sie nicht unter Ihrem wahren Stand und Nămen?”</p> <p>EILER “Aus Schaam über meine Lage.”</p> <p>MADAME PFEIL “Nun so hören Sie auch meine Geschichte. Sie ist bis dahin, wo Sie zurück kamen und Ihre Frau nicht mehr fanden, ganz gleich mit der so Sie eben erzählt haben. Also keine unnöthige Wiederholung. Ich wartete vergebens auf die Zurückkunft meines Geliebten, erhielt endlich dies Billet, worinn er mir glückliche Reise wünschte, und sich für das Vergnügen bedankte, so er vergangne Nacht genossen. Ich ward fast rasend; mußte mich zu retten suchen, und fuhr also mit dem Geistlichen, der mein ganzes Vertrauen besaß, fort. Wir giengen nach Holland, und von dort aus behauptete ich meine Rechte gegen meine Familie. Es entdeckte sich freulich nachher, daß das unglückliche Billet so mich fast um meine Sinnen gebracht hätte, von einem Freunde meines Bruders herrühre, welcher meine Flucht aus dem Kloster und meine Verbindung erfahren, und auf der Stelle kein besser Mittel wußte, uns einweilen zu trennen, und seinem Freunde Zeit zu verschaffen. Indessen war mein Geliebter verschwunden, und alle Mühe die ich mir bisher gab ihn auszuforschen, war umsonft.”</p> <p>EILER “Ums Himmels willen! Sie sind wohl gar --“</p> <p>MADAME PFEIL “Dein Weib! diese Elende, die Du für falsch hieltest.”</p> <p>EILER “Gerechter Himmel! Welche Wonne nach drei langen schmerzvollen Jahren!”</p> <p>MADAME PFEIL “Ob wir uns lieben?”</p> <p>EILER “Dürfen wir nicht fragen. Aber daß wir uns nicht erkannten?”</p> <p>MADAME PFEIL “Wir waren damals zu blind vor Liebe, als daß wir uns hätten im Andenken bleiben können.”</p> <p>Nun, was sagen Sie?</p>	<p>はこの惨事がどこから来たのか、私の人生に束縛をかけたのが誰なのかを知らずに来ました」</p> <p>プファイル夫人 「貴方はフォン・ヴァレン伯爵ですね？」</p> <p>アイラー (見栄を張って)「はい！」</p> <p>プファイル夫人 「貴方は何故本当の状態と名前の下に現れないのですか？」</p> <p>アイラー 「私の状況が恥ずかしいからです」</p> <p>プファイル夫人 「さあ、私の話を聞いてください。貴方が何と言おうと、それは貴方が戻ってきて、もはや貴方の妻を見つけられなかった場所のことです。不要な繰り返しは不要です。私は愛する人の帰りを無駄に待ち、ついにこの略式の手紙を手に入れました。そこで彼は私に幸せな旅を望み、昨晚楽しんだ喜びに感謝していました。私はほとんど怒っていましたが。私は逃げる努力をしなければならなかったので、信頼して聖職者と一緒に進みました。私たちはホラントに行き、そこから家族に対する私の権利を主張しました。私の修道院からの脱出と私の取引を知り、その場で私たちを引き離す手段をとれなかった私の別れた兄弟が、友人に時間を与えて、その友人が私に不幸な略式の手紙を出し、私から感覚を奪いそうになったのだという事実が明らかになったのはすぐ後のことでした。一方、私の恋人は姿を消し、彼を調査するために私がこれまでに味わってきた厄介事はすべて無駄に終わっています」</p> <p>アイラー 「天よ！ 貴方はおそらく…」</p> <p>プファイル夫人 (彼の首に落ち)「貴方の妻！ 貴方が間違っと思込んでいる不幸な妻。」</p> <p>アイラー 「ああ天よ！ 長い痛みを伴う 3 年後の何たる祝福か！」</p> <p>プファイル夫人 「私たちはお互いを愛していますか？」</p> <p>アイラー 「尋ねないように。しかし、私たちはお互いを認識しなかったのだろうか？」</p> <p>プファイル夫人 「その時、私たちは記憶にとどめることができないほど、愛に盲目でした」(腕を閉じて) (フランクに) さて、貴方は何と言いますか？</p>	<p>ホラントは現在のオランダの北ホラント州と南ホラント州に相当する地域</p>
--	---	--

犬輔：ところで「そのような小説もどきはジークヴァートに探しても見つけれないわ」という台詞がありました、どういことでしょうか。

鳥代：ヨハン・マルティン・ミラーの小説『ジークヴァート、修道院の物語 Siegwart: Eine Klostersgeschichte』(ライプツィヒ 1777) 注¹²のことよ。物語は「高貴な若者ジークヴァルトは、

シュヴァーベンのドナウ川沿いの村で生まれました」と、幼少期における兄二人と、元気な二人の姉たちとのエピソードから語られます。シュテファニーが参照したと思われるいくつかの部分を抜粋すれば「瞑想の後、私は庭を散歩したり、聖書、聖クリソストム、または美しく啓発的な本を本棚から出して、その中を歩いたのち、9時半まで、我らの時間を歌って過ごします」(p.18)、「テーブルの後、彼らはさらに数時間庭に行き、散歩するか、または茂みの中に座っていました。そこではブラックバード、ナイチンゲール、その他の鳥の群れが跳ね回り、ほとんど飼いならされているかの如くでした」(p.34)、「彼らは毎日散歩に出かけました。特に修道院に属する美しい庭で、彼らは[エーヴァルト・]クライストの詩、特に彼の春の詩を読みました」(p.236)と、散歩というキーワードが何回も出て来るの。因みに *spazieren* という動詞の原形で本文を検索するだけでも24件ヒットするわ。劇中劇が散歩のシーンであることから、この小説に言及したのですね。



犬輔：『新たに見出だした配偶者たち』は現実味のない話ですね。ただ、奇妙なのは“失われたと思われていた絆の判明”という点で改訂前後の劇中劇が共通しているということです。

鳥代：作品の狙いを考察するときのキーワードになるかも知れないわね。

4.2 シュテファニーのジングシュピール全集から『劇場支配人』改訂第5場

犬輔：第5場は『ピアンカ・カペッロ』からの引用をシュテファニーのオリジナル『夫の復讐 Die Rache des Ehemanns』の最終場に替えています。

鳥代：劇中劇の名前が紹介される第4場の途中から翻訳しましょう。

第4場 (途中から) 承前、クローネ夫人	
<p>PUF Ja, ja, das haben wir alles erfahren. Ich als lustiger Bedienter habe eine Schellenkappe aufsetzen, mich als Pickelhering kleiden und die Tragödie aufrecht halten müssen. Schicken Sie die tragische Prinzessin fort. MADAME KRONE Das weiß ich leider alles! Aber, Sie hoffte ich nicht so sprechen zu hören, Herr Frank. Ich glaube, es kommt immer auf den Direktor an, sein Publikum zu haben, wie er will. Gewöhnt er es an gute Sachen, wird es nichts Schlechtes verlangen. Nur muss er ihm nichts auftragen, woran es sich den Geschmack verderben kann; lieber eine Zeit lang lavieren – PUF und nichts geben, was ihm Geld bringt? So muss er desto geschwinder aufhören. MADAME KRONE Wie die Sache liegt, haben Sie dem Schein nach recht; aber wer ist schuld daran? Eben Sie und Ihre Kollegen. Denn wären die lustigen Bedienten aus dem Trauerspiel geblieben, so wäre es noch in seinem alten Wert. Doch ich will mich mit Ihnen in keinen Wortwechsel einlassen. Herr Frank, ich habe einen der besten tragischen Schauspieler bei mir, es ist Herr Herz. Wir wollen Ihnen die letzte Szene aus der Rache des Ehemanns spielen. Urteilen Sie dann, ob es nicht möglich wäre, die reine Empfindung auf dem Theater wieder geltend zu machen.</p>	<p>プーフ はい、はい、私たちは全てを伺いました。私は、陽気な下僕として帽子を被り、道化役<small>ピッケルヘリング</small>のような服を着て、悲劇を支えていかなければなりません (フランクに密かに) 悲劇の王女を追い返してください。 クローネ夫人 残念ながら私は全て知っております！でもフランクさん、貴方は私がこのように話すのを聞きたくなかった。望むように観客を集めることは、常に支配人にかかっていると思います。支配人が良いことに慣れていれば、悪いことを求めないでしょう。自身の味を台無しにするようなことだけは示してはいけません。むしろ少し時間をかけて —— プーフ 支配人の儲けになることを示さないと、彼は早々にやめなければなりません。 クローネ夫人 事態は外見上正しく捉えられているようですが、誰が責任を負うのですか？ 貴方と貴方の同僚だけ？ 陽気な下僕たちが悲劇の外に出ていたとすれば、それはまだ古い価値の中にあるでしょう。しかし、私は貴方と言葉の投げ合いをしたくありません。フランクさん、私は私の人生で最も悲劇的な俳優の一人を紹介します。それはヘルツ氏です。私たちは貴方のために『夫の復讐』の最終場から演じましょう。そのあとに、劇場で純粋なセンセーションを再現することが可能かどうか判断してください。 (彼女は現場に行き、ヘルツ氏を導く)</p>

第5場
承前、ヘルツ

<p>FRANK Mich freut es recht fehr Sie kennen zu lernen, ich habe viel Rühmliches von Ihnen gehört.</p> <p>HERZ Ich wüncfe nur, daß Sie es auch finden.</p> <p>MADAME KRONE Wir wollen's verfuchen. "Um Gottes willen Mann, was haft Du vor? warum ziehft Du mich mit folcher Heftigkeit in dies entlegne Gemach! Warum fchließt Du die Thüre ab? Barmherzigkeit! Hülfe!"</p> <p>HERZ "Dein Schreyen ift vergebens, niemand hört Dich als Gott, und niemand kann Dich retten als Gott."</p> <p>MADAME KRONE "Liebfter Mann! Schonung! Erbarmen mit mir!"</p> <p>HERZ "Steh auf! wir find noch nicht fo weit. Rechtfertige Dich, wenn Du kannst, bist Du unfehuldig, brauchft Du nicht zu zittern."</p> <p>MADAME KRONE "Das bin ich!"</p> <p>HERZ "Dem widerfpricht Dein Betragen. So zittert die Unfehuld nicht."</p> <p>MADAME KRONE "Ein fehwaches Weib, wie ich, zittert beym größten Rechte! Hat uns die Natur folche Stärke gegeben wie euch, um mit feftem Mütfe unfre Vertheidigung führen zu können?"</p> <p>HERZ "Wenn ihr Recht habt, feyd ihr taufendmal kühner im Vertheidigen als wir, nur wenn ihr euch von eurer Schuld übermannt fühlt, fchützt ihr eure Sehwäche vor, um euren Richter dadurch zu befechten, Genug. Nimm Deine Gedanken zufammen und antworte mir aufrichtig und ohne Trug, wie Du vor dem ewigen Richter antworten müßteft. Denn Falfchheit könnte Dich noch obendrein in die Hölle fehicken."</p> <p>MADAME KRONE "Um aller Barmherzigkeit willen, Mann! wie fürchterlich ift Dein Blick! Du zermalmft meine Gebeine damit!"</p> <p>HERZ "Es ift der Blick des ftrengen Richters, ich habe Dich lange gewarnt, ihn nicht auf Dich zu ziehen. Du haft meine Warnung nicht geachtet, Du mußft ihn alfo nun ertragen."</p> <p>MADAME KRONE "Befter Mann! Habe Mitleid mit meiner Angft!"</p> <p>HERZ "Mitleid kenne ich nun eben fo wenig, als Du</p>	<p>フランク (ヘルツに) お会いできてとても嬉しく思います。貴方に関する多くの賞賛を伺っております。</p> <p>ヘルツ 貴方にもそれを見出していただきたい。</p> <p>クローネ夫人 試してみましよう。(自分自身を恐ろしい立場に置く)「お願いだから、貴方、何をするつもり? 何故この隔離された部屋に、そんなに暴力的に私を引きずり込むの! (激しく叫ぶ) 何故ドアを閉めたの? お慈悲を! (窓に走って助けて!」</p> <p>ヘルツ (彼女を窓から引き離す) 「お前の叫び声は無駄であり、誰も神のように聞き入れてはくれず、誰も神のようにお前を救うことはできない」</p> <p>クローネ夫人 (不安な調子で)「最愛の人! お許しを! 私を憐れんでください!」(ひざまずく)</p> <p>ヘルツ 「起きろ! 準備はこれからだが、申し開きが可能であれば、お前は無実であり、震える必要はない」</p> <p>クローネ夫人 「私は無実です!」</p> <p>ヘルツ 「それはお前の振る舞いと矛盾している。無実なら震えるまい」</p> <p>クローネ夫人 「私のような弱い女は、震える最大限の権利があります! 自然は貴方に与えたような確固たる勇気で自己防衛可能な力を私たちに与えてくれたというのですか?」</p> <p>ヘルツ 「もしお前が権利を持っていると言うなら、お前は我々が防衛するよりも千倍も大胆だ。お前は罪悪感に打ち勝ったと感じたときに、裁判官を買収して弱さを守り抜くのだ。十分だ。永遠の裁き主の前で答えるのと同じように、お前の考えをまとめて、誠実に、誤魔化しなく私に答えるがいい。その上さらなる虚偽はお前を地獄に送るかもしれない」</p> <p>クローネ夫人 「ご慈悲をお願い、貴方! 怖い目つきをなさって! 貴方はそれで私の骨を砕きます!」</p> <p>ヘルツ 「それは厳格な裁判官の目つきだ、私はお前がそれを自分の方へ引き寄せないように長い間警告してきた。お前は私の警告に注意を払わなかったのだから、今それを我慢しなければならぬのだ」</p> <p>クローネ夫人 「愛しい方! 恐れてごめんなさい!」</p> <p>ヘルツ 「お前は私の拷問された心に対し、随分慎</p>
---	---

<p>bisher Schonung für mein gequältes Herz kannteft. Ich kenne nur Gerechtigkeit, und die foll Dir werden, wie es Deine Thaten heifchen. Zur Sache: Warft Du nicht eine arme verlaßne Waife, als ich Dich kennen lernte, beftimmt, entweder Deinen Unterhalt durch Dienen zu fuchen, oder ein fchädliches Gewerbe zu ergreifen, und Deinen Leib dem erften beften Wollüftling zu vermiiethen?"</p> <p>MADAME KRONE "Ich war verlaßnen – aber ich hätte doch nicht gethan, was Du mich befchuldigt,"</p> <p>HERZ "O nur allzugewiß! Doch weiter: gab ich Dir nicht aus überfchwenglicher Liebe meine Hand, machte Dich zu meinem Weibe? theilte, was ich erwarb, redlich mit Dir? Besaßest Du nicht mein Herz in einem fo unbefchränkten Grade, daß ich nichts achtete, um Deine Wünfche zu befriedigen und Dich vor Verführung zu fichern?"</p> <p>MADAME KRONE "Wahr!"</p> <p>HERZ "Sagte ich Dir nicht unzähligemal, in Stunden der Liebe und im Schmerz der Seele, daß Dein ungetheilten Befitz meine ganze Seeligkeit ausmache, daß hingegen Untreue mich zum reiffenden Tyger machen würde, und daß Leben und Tod, Seligkeit und Hölle mir in einem folchen fchrecklichen Augenblick gleichbedeutende Sachen feyn würden?"</p> <p>MADAME KRONE "O wie follt' ich das vergeffen haben, da Du fo oft mein Herz damit zerriffen und mir fo viele Thränen dadurch entlockt haft?"</p> <p>HERZ "Thränen haft Du genung vergoffen, das kann ich Dir bezeugen; aber es waren weder Thränen der gekränkten Unfchuld, noch Thränen der Neue; Boßheit, Deine Händlungen nicht fo vor mir verbergen zu können, Unmuth über meine aushaltende Aufmerkfamkeit auf Dein Betragen, preßte Dir fie aus, und eben daher machten fie wenig oder gar keinen Eindruck bey mir, erbitterten mich viele mehr."</p> <p>MADAME KRONE "Nicht fo Mann, fchwärze nicht alle weine Handlungen fo abfcheulich, daß ich felbft davor zurückbeben müßte, wenn es fo wäre. Es waren meiftentheils Thränen des Kammers, Dich mit all meiner Liebe von Deiner fchrecklichen Eifer fucht nicht heilen zu können. Ich war jung, fchön, als Du mich kennen lernteft; lag es an mir, daß mich mehrere bewunderten, als Du?, daß man mir nachftrebte? Ift es immer Schuld des Weibes oder ift fie deshalb strafbar, wenn andre als ihr Mann darnach trachten, ihr von Liebe vorzureden? fich bemühen ihr es</p>	<p>重だつたので、ほとんど慈悲を感じない。私は正義だけに馴染んでいる。お前の行為がそれを必要とするなら、それをわきまえてもらいたいものだ。事の核心は：お前と出会ったとき、お前は召使の受け入れ先を探るか、乱雑な取り引きをして、これはという最初の道楽者を相手に身を貸すか、いづれかを運命づけられていた貧しい棄てられた孤児ではなかったか？」</p> <p>クローネ夫人 (すすり泣く)「私に見捨てられました — でも、私は貴方が非難するようなことをしていません」</p> <p>ヘルツ 「ああ、そうだろう！ だが、さらに：私はお前に熱烈な愛の手を差し伸べたのではなかったか、お前を私の妻にしたのではないか？ 私が取得したものをお前と共有したのではないか？ お前が私の心をあまりにも無限に独占していたため、お前の願いを満たす誘惑からお前を救うことに注意を払うことが出来なかったのではなかったか？」</p> <p>クローネ夫人 (上記のとおり)「確かに！」</p> <p>ヘルツ 「愛の時間の中で、魂の痛みの中で、何回もお前に告げたのは、お前の“非共有所有権”が私の至福全体を消してしまったということ、その不実が私を獐猛な虎にしてしまうだろうということ、そしてその生と死、至福と地獄が、私にとって、このような恐ろしい瞬間と同義語であったということではなかったか？」</p> <p>クローネ夫人 「ああ、どうして私はそのことを忘れてしまったのでしょうか。貴方はしばしばそれで私の心を引き裂いたので、私から非常に多くの涙を引き出しましたね？」</p> <p>ヘルツ 「お前は涙を流した、私はお前にそう証言することはできる：だが、それは傷つけられた無実の涙でも、新しい涙でもなかった；お前の行動を私から隠せないことへの不安、お前の行動に私が注意を払うことへの嫌悪感が、お前に涙を流させた。そのため、涙は、ほとんど、またはまったく私に印象を与えなかった。</p> <p>クローネ夫人 「そうではありません、貴方。もしそうなら、私はそのために震えざるをえません。ですからすべての涙の行為をそれほどひどく黒塗りしないでください。これらのほとんどは個室での涙でした、そして、私のすべての愛でも貴方をひどい激怒から癒すことはできませんでした。貴方が私に会ったとき、私は若く、美しかった。幾人かの人たちが貴方以上に私を賞讃してくれたことや、私が言い寄られたことは私の責任だったというのですか？ それはいつも妻のせいですか。あるいは彼女の夫がするように</p>
---	--

merken zu lassen? und wo ist das Weib, das durch ihre Jugend und Schönheit Aufmerksamkeit erregt und so ganz frey von aller Eitelkeit ist, daß es ihr nicht gefallen sollte, wenn sie mehrere als ihr Mann liebenswerth finden? begeht sie dadurch ein Verbrechen oder eine Untreue, ist es nicht oft Befriedigung eines liebenswerthen Stolzes, wenn sie sich sagen kann, ich fühle, daß ich meines Mannes werth bin, dieser Werth wird mich ihm theur machen und mich vor seiner Untreue sichern. Dies Gefühl Mann! war lange Zeit der Schild meiner Liebe gegen Dich, aber Du hast es unterdrückt, Deine quälende Eiferfucht hat es in Unmuth und Kälte verwandelt. Es ist Deine Schuld, nicht meine, wenn Du mich in der Folge verändert fandest! O Männer, ihr wißt nicht, welchen Nachtheil euch eine ungerechte Eiferfucht bringt ihr quält uns oft bis zur Verzweiflung und zwingt uns dann zu Handlungen, die wir verabscheuen würden, wenn ihr uns nicht immer unverdienter Weise derselben beschuldigte.”

HERZ

“Du willst Dich entschuldigen und klagst Mich nur an. Wenn ein Mann also auf den ungetheilten Besitz seines Weibes aufmerksam wacht, so läuft er Gefahr, ihre Liebe zu verlieren? Kälte zu erregen, und sie zur Untreue zu zwingen? Was wäre denn also das Mittel, ein treues Weib zu haben? sie dem Strohme der Verführung ungefört zu überlassen und es ruhig aufs gefährliche Ohngefähr ankommen lassen, ob sie unbefleckt entkommt oder nicht? Dazu gehören flatterhafte, leichtfönnige Herzen, ohne Stolz und Ehre, denen es gleichgültig ist, ob sie betrogen werden, und dafür im Gegenbetrug Schadloßhaltung suchen. Von dieser Gattung war ich nicht, das hättest Du gleich merken können, und also meine Ruhe nicht auf dem gefährlichsten Pfade herzustellen suchen sollen.”

MADAME KRONE

“Aber was blieb mir denn wohl übrig, da Dich nichts von meiner Treue überzeugen konnte?”

HERZ

“Ha! Du setzt mich zu früh in Wuth? Du bringst Deine Treue in Anschlag? Beweise sie oder stirb den Tod einer Verbrecherin und fahre zur Hölle.”

MADAME KRONE

“Um aller Liebe willen, die Du einst für mich hattest, die Du vorgiebst noch für mich zu haben, übereile Dich nicht, bittere schmerzliche Neue würde Deiner That folgen! Was willst Du von mir? was soll ich thun?”

HERZ

“Dein Verbrechen gefeht oder als Lügnerin

他の男が真似して彼女に愛を語ろうと熱望するとき、彼女は罰せられるのですか？ それを貴方は記憶したいのですか？ そして、若さと美しさによって注目を集め、すべての虚栄さから解放されていた妻はどこにいますか。彼女は虚栄を好みません。彼女が、夫が感じるように、誰かを愛すべきと感じた場合のことですか？ 彼女はそれによって犯罪や不実を犯すというのですか。彼女が“私は夫を大切にしている”と思ってくれば、多くの場合、それは愛すべき誇りの満足になりませんか。この価値は私に夫を愛させ、彼の不誠実さから私を守ります。この多感な方！ 長い間、私の愛の盾は貴方に対してのものでしたが、貴方はそれを抑制してきました。貴方の苦しむ嫉妬はそれを嫌悪感と冷酷さに変えました。エピソードで私が変わったことを見つけたなら、それは私のせいではなく貴方のせいです！ 男性よ、貴方は知らない、不幸が不当な嫉妬をもたらし、絶望するように私たちを苦しめ、それから私たちに行動を強いることを。そして貴方が私たちにそれを不当に非難しない場合に、私たちはそれを嫌っているということ。」

ヘルツ

「お前は弁解し、私を非難したいだけだ。それで、妻の分割されていない所有（非共有財産）を夫が注意深く見ると、彼は彼女の愛を失う危険にさらされるというのか？ 寒さを引き起こし、彼女に不倫を強いるというのか？ 何が忠実な妻を持つ手段だというのか？ 邪魔されずに彼女を誘惑の流れに放り込み、落ち着いてその状態を危険な偶然に冷静に近づけさせる。彼女は完全に逃げるだろうか？ これらには、誇りも名誉もない、無気力で無謀な心が含まれている。これに対応する対策を探す。お前はすぐに気付いたかもしれないが、私はこの種の間人ではないので、最も危険な道で休息を取り戻そうとしてはいけない」

クローネ夫人

「でも、私に残されたものは何ですか？ なぜなら、貴方は私の忠誠心について何も納得できないと仰るのですか？」

ヘルツ

「ハ！ お前は早速私を怒らせるのか？ お前は攻撃に自らの忠誠心をもって来るのか？ お前は忠誠心を証明せよ。さもなくば犯罪者の精神を死に至らしめ、地獄に行け」

クローネ夫人

「貴方がかつて私のために持っていた、あるいは貴方が私のために持っているふりをしていたすべての愛にかけて、急がないで、苦い新しい痛みは貴方の行為に従うでしょう！ 貴方は私に何を望みますか？ 私はどうすればいいですか？」

ヘルツ

「お前の犯罪を告白するか、嘘つきとして

<p>zur Hölle fahren. MADAME KRONE “Ha! Barmherzigkeit! Morde mich nicht unvorbereitet. Laß mir Zeit, meine Sünden zu bekennen, und mich zur Abfahrt zu bereiten!” HERZ “Das sey Dir gewährt. Aber offnes Bekenntniß will ich, heisch' ich von Dir, sonst fährt dieser Stahl in Dein verruchtes Herz und wehe Dir dann vor dem ewigen Richter. Im Gegentheil, bekennst Du wahrhaft reuevoll, so leitet vielleicht jenes gütige Wesen mein Herz zur Vergebung. Sprich, haft Du nicht mit jenem milchbärtigen, glattzüngigen, weibischen Buben heimliche Liebe gepflogen, mein Ehebette geschändet? Wahrheit! denke an den ewigen Richter.” MADAME KRONE “Laß mich beten! Erbarmen, Nachsicht, Entschuldigung ist Dir nichtfeigen, das weis ich – – Also – Laß mich beten!” HERZ “Also eingestanden? Du haft mich betrogen?” MADAME KRONE “Nur ein kurzes Gebet! Ich will mich meiner Sünden entladen – ja, – ich war schwach genug feiner Schmeicheley Gehör zu geben – – Deine Strenge jagte mich in seine Arme – – Aber ach! hättest Du gefehnt mit welchem Unmuth und Widerwillen ich Gehör gab, – Du würdest mich bedauern, statt mich zu strafen. Du! Du warst Schuld daran!” HERZ “Ha! Schändliche!” MADAME KRONE “Nur noch einen Augenblick verschiebe Deine Rache! Allmächtiges, allgütiges Wesen! Du weißt wie ich mit meiner Leidenschaft gerungen, wie ich bloß im Sturm des Unmuths über meines Mannes quälende Strenge zum ersten Fehltritt hingerissen wurde; wie wenig Vorfaß zur Sünde bey mir war – – Vergieb also meine Schwachheit, deren Trieb Du in uns gelegt haft, und nicht Stärke genug, ihm ganz zu widerstehen – leite meinen Mann ab von dem Verbrechen, mit dem er sich beladen will, und strafe mich allein – ist es aber Dein Wille ihn durch mich mit zu strafen, so nimm meine Seele gnädig auf.” HERZ “Amen! – fahre hin zur Ruhe unglückliches Geschöpf!” MADAME KRONE “Ich vergeb Dir – Vergieb – – auch – – mir!” HERZ “Von ganzer Seele! O mein geliebtes Weib! Reichthum meines Herzens! Du bist dahin, und</p>	<p>地獄に行け。(短剣を抜く)』 クローネ夫人 「ハ！慈悲を！準備ができていない私を殺さないでください。罪を告白し、出発の準備をする時間をください！」 ヘルツ 「それはお前に認める。だが私はお前のオープンな告白が欲しい。さもなければこの鉄がお前の邪悪な心臓に入り、そして永遠の裁き主の前でお前に災いをもたらすだろう。お前が本当に悔い改めを告白するなら、むしろ、おそらくそのような存在が私の心を許しに導くだろう。たとえば、あごひげを生やした、滑らかな話しぶりの、女のような男の子と、秘密の愛が生まれ、私のダブルベッドを汚した、そのような経験をお前は持っていないか？ 真実を！ 永遠の裁き主について考えて見ろ」(短剣を持ち上げる) クローネ夫人 (全くの恐怖で)「祈らせてください！ お許しください、忍耐を。ごめんなさい、私はそれに心当たりがあります。— だから — 祈らせてください！」 ヘルツ 「さあ、認めたか？ 私を裏切ったか？」 クローネ夫人 「短い祈りを！ 私は自分の罪を解き放ちたい — はい、— 私は弱く、彼のお世辞を聞いてしまった — 貴方の厳しさが私を彼の腕に追い込みました。でも、悲しいかな！ 貴方が何らかの不快感や嫌悪感で見ているら、私は耳を傾けたでしょう。— 貴方は私を罰する代わりに後悔するでしょう。貴方！ 貴方が非難されるべきでした」 ヘルツ 「ハ！（彼女に短剣を突き付ける）恥じよ！」 クローネ夫人 (後ずさって跪く)「少しだけ復讐を遅らせてください！（死を恐れる表情で）全能の、すべての善き存在よ！ 最初の失敗による夫の苦しみの厳しさに対し、私が嫌悪感の嵐に連れ去られたとき、私が激情とどのように戦ったかを貴方はご存じです。私が罪を犯したことはどれほど小さなことだったでしょう — 私の弱さを許してください。私の衝動は貴方が私たちの中に据えたものであり、完全に抵抗できるほどの強さはありません — 私の夫を彼自身に負担をかけるであろう罪から反らし、私だけを罰してください — しかしそれは貴方の意志です。私を罰するために、私の魂を寛大に受け取ってください」 ヘルツ (彼女を刺す)「アーメン！ — さらば。不幸な人間を休めるために！」 クローネ夫人 (死にながら)「私は貴方を許します — 許します — また — 私も！」 ヘルツ (彼女の上に倒れる)「私の全精神よ！ ああ、愛する妻よ！ 私の心の糧よ！ お前がいな</p>
--	---

<p>mit Dir auch mein Leben! Alle Plagen eines ewig folternden Gewissens fallen auf den verfluchten Verführer dieses Engels Niemäffe mehr einen Augenblick Ruhe in dein Teufelsherz kommen, Verzweiflung sey dein Ende, und die Hölle dein Lohn! —Schrecklich ist meine That aber gerecht! Möchte jeder gekränkte Ehemann meinem Beispiele folgen, so würde Furcht vor einem ähnlichen Schicksal die eheliche Treue befestigen, und niemand würde sich mehr scheuen in Ehestand zu treten. — Engel! erlehe mir Gnade, damit wir oben wieder vereint werden und ungestört die Ruhe genießen, die uns hier ein wollüstiger Schurke geraubt hat! — Nicht aus Furcht vor dem weltlichen Gericht, sondern meine That schreckender zu machen, und an Deiner Seite zu sterben, folge ich Dir — Gnade! — Schöpfer Gnade!”</p> <p>FRANK</p> <p>Vortreflich! Ja wohl Madame sind solche Schauspieler fähig die reine Empfindung auf dem Theater wieder geltend zu machen. Wollen Sie bey mir -bleiben? Lzu Herz. Auch Sie? so schön mich glücklich. Aber mehr als vierzehn Thaler die Woche kann ich jedem von Ihnen nicht geben,</p> <p>MADAME KRONE</p> <p>Vollkommen zufrieden. Die Art, mit der Sie solche anbieten, ist hinlänglich ersatz.</p> <p>PUF</p> <p>Herr Frank, da haben Sie einen dummen Streich gemacht, die Leute wollen lachen, nicht ächzen.</p> <p>FRANK</p> <p>Es gieht auch welche, die noch Herzen haben,</p>	<p>くなり、そしてお前と私の人生よ！ (飛び上がって激烈な怒りに突入する) 永遠に拷問される良心の疫病はすべて、この天使の呪われた誘惑者に降りかかる。彼の悪魔の心に一瞬の休息はもう来ない。しかし、私の行いは正しい！ すべての傷つけられた夫が私の例に従うことを望むなら、同様の運命への恐怖は結婚の忠実さを保証し、誰も結婚することを恐れないだろう。(再び死体の上に倒れる) — 天使よ！ 私に慈悲を。私たちが天上で再会し、邪魔されずに平和と静けさを楽しめるように。貴方はここで私たちから官能的な裏切り者を奪いました！ — 世俗的な判断に対する恐れからではなく、私の行動をより恐ろしくするために、そして、貴方の側で死ぬために、私は貴方に従います— (刺して傍らに崩れる) 慈悲を！ 恵みを！」 (シーンが終わったことを示す)</p> <p>フランク</p> <p>素晴らしい！ そうです、マダム。そのような俳優たちは劇場の中で純粋な感覚を再主張することができます。私と一緒にやりたいですか？ (ヘルツに) また貴方も？ それが私を幸せにするものです。しかし、私は一週間に14ターラー以上を貴方に差し上げることができません。</p> <p>クローネ夫人</p> <p>完全に満足しています。貴方が提示した手立ては十分な対価です。</p> <p>プーフ</p> <p>(密かに) フランクさん、貴方はばかげたことをしました。人々は呻(うめ)きたいのではなく、笑いたいです。</p> <p>フランク</p> <p>まだ心を持っている人もいくらかはいるものだ。</p>
--	--

犬輔：血なまぐさい修羅場が印象的ですが、お互いが言い合っている弁解や非難が人間の弱さの本質を突いているのでしょうか。

鳥代：長い台詞や否定疑問文(反語)が多いのは悲劇の特徴でもあるのでしょうか。

教授：『ヴィーン実報』で改善を指摘された「もっと効果を上げるような状況を作り出すこと」が修羅場を描写することだとシュテファニーが考えたのだとすれば、随分単純で安直な解決方法だと諸君たちは思わないかね。

犬輔：“不倫妻殺害と自殺”つまり“不倫妻との無理心中”は、演劇のテーマとしては19世紀以降という感じがします。改訂版発行の1792年は19世紀の直前ですが、レーオポルト2世即位の1790年から既に19世紀的になったとぼくは常々思っているんです。

教授：時代の変化が刺激的な題材を要求し、それを的確に実現したということだね。

鳥代：でも、カトリックの教えでは自殺は厳しく戒められているのでしょうか。

教授：そうなのだが当時のヴィーンにも自殺はあったのだ。モーツァルトの死の数日後^{註13}に起きた所謂“ホーフデーメル事件”を諸君たちは知らないかな。ヴィーン新聞の1791.12.10の死亡欄には、「最高裁判所書記官のフランツ・ホーフデーメル氏36歳は、グリュナンガーガッセ1360番地の住居にて自殺した(sich selbst ermordet)」と掲載されている。この事件は、妻マグダレーナを切りつけた殺害未遂の後に起こったとの噂や、妻の不倫相手がモーツァルトではないかという噂によって有名になったが、シュテファニーの改訂版がその噂を参考にできたのかどうかは、出版が1792年の何時なのか不明なため何とも言えない。

犬輔：“ホーフデーメル事件”は“自殺”だけが明らかで、あとはエビデンスがないんですね。

教授：それより、仮定だが、もしこの改訂部分に音楽を付けるよう求められたら、モーツァルトはびつたりの音楽を書けたらどうか、という問いの方が私には興味がある。

5. 登場人物のモデルについて

5.1 プーフのモデルについて

鳥代：レイバーン^{注14}はプーフ Puff のモデルがリチャード・ブリンズリー・シェリダン Richard Brinsley Sheridan (1751-1816) の劇『批評家 The Critic』(1779)^{注15}の登場人物 Puff であろうと言っています。

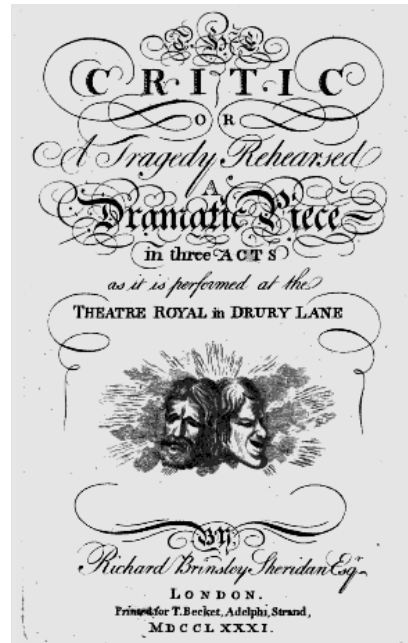
犬輔：えっ、リチャード・ブリンズリー・シェリダンはフランセス・シェリダンの息子ですよ。ということは『判明した事実 The Discovery』と『批評家 The Critic』というイギリスの劇作家母子の二つの作品にシュテファニーは影響を受けているんですね。

鳥代：この劇は、登場人物の名前が面白いの。批評家のダングル [ぶら下がる] 氏、その批評家仲間友人であるスニーア [嘲笑する]、劇作家サー・フレットフル [こせこせした]・プラジャリー [盗作]、オペラ歌手のパステイッチョ [混ぜこぜ]・リトルネッコ [繰り返し] 氏、オペラのパトロンであるレディ・ロンドー [とめどなく繰り返す] とフーガ「逃げていく」夫人などに加えて、パフ Puff が登場するのよ。パフの活躍を纏めると次の通りになるわ。「劇作家であり広告作家でもあるパフは、ダングルの友人です。彼の歴史悲劇『スペイン艦隊』が、第2幕と第3幕でリハーサルされます。パフは自分を“称賛演説の実践者”または“誉めそやし [パフィンク] 芸術の教授”と呼びます。パフの“褒め上げる [パファアップ]”日常言語能力が彼の生計を立てています。パフは、チケットの売り上げを伸ばすために演劇の虚偽の解説記事を作成し、入札者に商品をより魅力的にする方法を、水増しされた言語を使用して競売人に教え、さらには新聞で未亡人（または他のチャリティ案件）になりすまして、親切な（だまされやすい）読者の支援を求めます。（“私は自分の不幸によって完全に2年間自分を支えました”と彼は説明します）。パフにはさまざまな“誉めそやし [パフィンク]”の方法があります。例えば“直接の誉めそやし [パフ・ダイレクト]”（初演の前日に劇のポジティブな解説記事を書いてしまう）または“談合の誉めそやし [パフ・コルーシヴ]”（不道德またはスキャンダルを利用しすぎだとして本や詩を非難し、それによってすぐにそれを買うように大衆を扇動している）を書いています。現在、パフは劇場に目を向けており、そこでは“作り話と装飾の才能”を満喫できます。

パフは彼の演劇のリハーサル中、監督に期待されるすべての神経の集中度を示します。リハーサル場面のユーモアの一部は、パフが（第1幕 第1場のサー・フレットフルのように）ダングルとスニーアからの演劇に対するあらゆる否定的な批判から身を守る方法にあります。たとえば、スニーアがパフの演劇でシェークスピアのオセロの台詞の一行を見つけたことに対して、パフは“それは重要ではありません——言えることは、たまたま二人が同じ考えを思いついたことです”と説明します。彼の恥知らずな自己防衛の烙印は、演劇を通して示されています。

犬輔：“誉めそやし広告作家”のパフがプーフのモデルだというわけですね。でもパフは作家ですから無責任な皮肉屋で通りますが、プーフは俳優兼“影の経営者”ですからリアリストですし、諭す力もあります。ちょっと違うのではないかな。

鳥代：そうね。むしろ、『批評家』の登場人物の意味ありげな名前を名付け方を踏襲したという方があり得るわね。フランク [率直な人]、アイラー [慌ただしい人]、プーフ [ゴツと殴る人]、ヘルツ [人情ある人]、プファイル [人を突き刺す言葉を発する人]、クローネ [栄冠の人]、フオーゲルザング [鳥のような歌を披露する人]、ジルバークラング [朗々とした響きの人] ですから。



5.2 レーシェンとミヒェルのモデルについて

犬輔：改訂版の第3場での劇中劇『新たに見つかった配偶者たち』では女性の名前が不明です。さらに第5場の劇中劇『夫の復讐』には男女とも名前が出てきません。

鳥代：既存の作品の引用でないため、敢えて名付ける必要はないと割り切っているのでしょうか。作劇上の匿名効果は、既知の名前が纏っている先入観に囚われないということ、またその結果として、二番煎じでない新鮮な劇というイメージが得られる効果も期待されるでしょう。

犬輔：それならば、もともとシュテファニーのオリジナルである第6場の『利発な百姓女』の登場人物にレーシェンとミヒェルという名前を与えたのは、逆に既知の名前が纏っている先入観に囚われてほしいと作者が考えたと思っていいいわけですね。

鳥代：以前にも話題になったけれど、やはりレーシェンはM・A・アーダムベルガーが演じたヨハン・ラウテンシュトラウフの喜劇『弁護士と農夫』のロジーネを仄めかしていたのだわ。

犬輔：では、ミヒエルはどうなんだろう。

鳥代：ミヒエルを18世紀の辞書^{注16}で引くと「軽蔑的な意味で：愚かなミヒエル、愚かな男、愚か、馬鹿、無知。大雑把なミヒエル。粗雑、無礼、失礼」とあるから、それを仄めかしたのでしょうか。シュテファニーが参照したであろう多くの劇作品にミヒエルが出て来るから、当時の劇ではお馴染みの登場人物名だったようね。

6. まとめ

犬輔：俳優・歌手と配役の対応が付いたことによって、二組の夫婦が配役上でも夫婦であることが分かりました。一方、三組目のシュテファニー夫妻は夫人の方が他の役の愛人ということでした。台本作者夫妻が汚れ役を引き受けるというのは、制作上の配慮でしょう。

鳥代：プーフ役の俳優が最後のヴォードヴィルで歌を与えられているのは、歌える俳優が皆無ではなかったということなのね。歌が上手か下手かを別にすれば、そのような能力のある俳優がここで選ばれたと考えるのが妥当でしょう。

犬輔：改訂版の『新たに見出だした配偶者たち』と『夫の復讐』は夫々、イギリス劇、イタリア劇からの引用というオリジナル版にあった特徴がなくなっています。

鳥代：一方、初めからシュテファニー創作の劇中劇である『利発な百姓女』が一貫して存在感を持っていることから、その主題である“捕らぬ狸の皮算用”がフランクの立ち上げた劇団の成功への期待感が糠喜びに転じることへの暗示を含んでいるとも考えられるわね。

教授：今回はこのくらいにして、狙いについて次回までによく研究しておきたまえ。

注1：Otto Jahn: W.A. Mozart. Erstdruck: Leipzig: Breitkopf & Härtel, Bd. 4, 1859, S.155 では「シェーンブルンでのガーデンフェスティバルの直後にフェスティバル全体がケルトナートーア劇場で上演された（最初が2月11日）」と正しく伝えていたが、Otto Jahn: W. A. Mozart. Zweite durchaus umgearbeitete Auflage. Breitkopf & Härtel, Bd.2, 1867, S.221-222 では「シェーンブルンでの公演後すぐに、フェスティバル全体がケルトナートーア劇場で2回繰り返された」と1回減っている。和文文献では渡邊護『モーツァルトの歌劇：解説と研究』音楽之友社(1956)がこの説をとっている。この誤りの経緯については、Otto Erich Deutsch: Mozart die dokumente seines Lebens S.232 で「11日に設定されていた上演がキャンセルされたと間違っ推定されていた；実際には歌手ダウアーの体調不良により10日のグルックの《メッカの巡礼 Die Pilgrime von Mekka》がウムラウフの《鬼火 Das Irrlicht》に変更になったのであった」と報告されている。つまり全く無関係の歌手と取り違えられていたのである。

注2：日記は未出版。Otto Erich Deutsch 前掲書 S.229-230 による。

注3：Otto Erich Deutsch 前掲書 S.232 による

注4：Otto Erich Deutsch 前掲書 S.233 による

注5：前年1785年の祝宴にかんしては、松田聡「一七八六年二月のシェーンブルン宮殿におけるモーツァルトとサリエリの「競演」再考——ウィーンの宮廷劇場における公演の体制との関わりにおいて——」美學、第54巻2号(214号)、2003、2003、70-83頁によれば、1785.2.6に、同じシェーンブルン宮殿のオランジェリーで“冬の日の春の祝宴 Frühlingsfest an einem Wintertage”と呼ばれる催しが開かれており、また、ヨーゼフ二世の時代、オランジェリーで開かれたこの種の祝宴は、二回だけだったようである、とのことである。

注6：プーフ役をランゲが演じたと間違っ紹介されている和文文献は、渡邊護『モーツァルトの歌劇：解説と研究』音楽之友社(1956)122頁、吉田泰輔『中央公論モーツァルト大全集第VIII巻』(1978)72頁、磯山雅『小学館モーツァルト全集第13巻』(1993)161頁など。

注7：Otto Jahn: W.A. Mozart. Erstdruck: Leipzig: Breitkopf & Härtel, Bd. 4, 1859, S.153, Anm.14

注8：Otto Jahn: W. A. Mozart. Zweite durchaus umgearbeitete Auflage. Breitkopf & Härtel, Bd.2, 1867, S.219

注9：Christopher Raeburn: "An Evening at Schönbrunn" in The Music Review 16, No.2 (1955) pp. 96-110. 文献複写に際しては福地勝美氏のご協力をいただいた。記して感謝する。

注10：ゲルハルト・クロルは新モーツァルト全集序文(1958)の注6で「[伝承された配役の間違については] オットー・ヤーン(本稿注7の文献)を見よ。間違いはレイバーンの記事(本稿注9の文献)にて指摘された」と述べているのみで、必ずしもレイバーンの修正案を全面的に受け入れているわけではないニュアンスである。しかし「間違い」とははっきりと述べている。それにもかかわらず、新全集発刊後もヤーンの説が纏綿と伝えられてきているのはモーツァルト受容史のミステリーとしか言いようがない。

注11：Stephanie des Jüngern fämmtliche S i n g f i e l e. Die fhöne Schufterinn. Die glücklichen Jäger. Mufik von Umlauf. Der Apotheker u. Doktor. Die Liebe im Narrenhaufe. Mufik von Dittersdorf. Der Schaufpieldirektor, Mufik von Mozart. Liegnitz, bey David Siegert, 1792. なお、当該巻から表紙の欠けた Der Schaufpieldirektor をアップしているサイトが1790と謳っているのは、“1790年代”の意味と考えられる。

注12：Johann Martin Miller: Siegwart. Eine Klostergeschichte. 2. verbesserte Auflage, Weygand, 1777. ミラーはゾルバークラング嬢の rond 「凛々しい若い方！私は喜んで」の原典「愛の絆」の作者でもあった。

注13：検死記録(A-Wsa, TBP 95, lit. H, fol. 80r)では12月6日を、凍結遺産記録(WStLA, Mag. ZG, A2, 3730/1791)およびウィーン新聞(WZ No. 101/1791, p. 3225)では12月10日を死亡日としており、ウィーン総合病院の記録(Alservorstadtparfar, Tom. 4, fol. 48)では12月7日を死亡日、12月9日を埋葬日としている。以上は Michael Lorenz: のブログ < <http://michaelorenz.blogspot.com/2014/08/eva-gesine-baur-does-archival-research.html> > Eva Gesine Baur Does Archival Research (Aug 29, 2014) による。

注14：レイバーン前掲書99頁、注17

注15：Richard Brinsley Sheridan: The Critic Or, A Tragedy Rehearsed: A Dramatic Piece in Three Acts as it is Performed at the Theatre Royal in Drury Lane, T. Becket, 1781

注16：Nuovo dizionario italiano-tedesco composta sul dizionario dell'Academia della crusca e su quello dell'abate Francesco de Alberti: oder Neues italienisch-deutsches Wörterbuch, Schwickert, 1789, S.1328. 同辞書のミヒヤエルの項には「男子名、ミヒヤエル。聖ミヒヤエルの日。聖ミヒヤエル見本市」とのみある。

(2019年12月20日作成、2020年8月20日改訂)